

「また、だまされた！」この駄文を書いているのは1月18日朝。コンビニに立ち寄ったら、産経新聞の一面の大見出しが「西成区優遇、特区へ―橋下市長」だったから思わず買った。読んでみると、とてもトップを飾る記事ではない。この手で何回産経を買わされたことか。

産経が書いているのは3点。一つ目は、大阪府外から子育て世帯誘致のために市民税や府民税、固定資産税などを減税し、西成区民だけ私立中高生への私学助成も行う。二つ目は、環境局などからの余剰人員を配置して治安を改善する。三つ目は、区長公募において西成区だけ市長の直轄区にする「可能性」もある。そして、橋下市長が「西成区をえこひいきする」と述べたとも書いている。

三つ目は多分プロパガンダで、「えこひいき」発言同様、いかにも橋下さんらしい。二つ目は、西成区にとって「あんたの勝手でしょう」で、財多くして効は低い愚策。一つ目は反対じゃない。ただ、最近の橋下市長の減税による市場誘発には、「大山鳴動して鼠一匹」になるのではと、橋下流「バラマキ」を危惧してしまうのは、ボクのひがみ根性か？それでも、橋下さんはやっぱりディベートの天才で、西成区の困難に、当たり障りのない発言を繰り返してきたこれまでの市長とは違うかもと、シンパシーを感じたのはボクだけではないだろう。



「蔭の西成区長室」はスタッフ募集中

橋下さん、西成区再生のキーワードはやっぱり生活保護。ボクは、生活保護は「減らす、守る」ではなく、「活かす」のが改革と言い続けてきた。ホームレスの青テントが公園を「占拠」してる様を見て、「強制代執行」するより「公園（福祉）があったのがせめてもの救い」と見て、「公園で寝てる人から、公園で働く人へ」と社会企業にしたボク達には先見があった。同じように、「生活保護（福祉）があって良かった」と観て、いきなり「仕事さえあれば」と急がずに、保護費で「心豊かに暮らして」くれれば、産業が育つかも…と考察することから社会企業が始まる。ボク達は、その一つとして、生活保護の人が喜んで入居してくれる賃貸住宅は、子育て世帯や若者も選んでくれるかもと、「第三の住宅」を供給してきた。「西成の地場産業はNPO」と言って、「こんなあったらいいなあ」と「はたらきたいなあ」を結びつけて、「福祉を興す」とも構想してきた。

ボクは、聖人とはほど遠い野人なので、区長公募には立候補しなかった（笑）。でも、「せっかくの」橋下市長なので、新西成区長にはシャドー・キャビネットの如く、対案を持って協力しようと思っている。わが㈱ナイスの「蔭の西成区長室」はいまスタッフ募集中です。「蔭」は「影」ではなく、「お蔭」の意味も込めて、共生を意味している。

㈱ナイス代表取締役 富田一幸



灰とダイヤモンド



監督：アンジェイ・ワイダ
原作：イエジー・ヴィツキ
キャスト：ズビグニェフ・ツィブルスキー
エヴァ・クジジエフスカ
製作：1958年ポーランド
モノクロ 103min
DVD発売：紀伊国屋書店

少年時代は鞍馬天狗、月光仮面など正義の味方が映画やTVを舞台に活躍した。そして青年時代。ゲバラ、毛沢東、チトーら共産主義者が、正義の体現者として世界を舞台に登場した。時代がかわっても正義をめざすヒーローたちを、夢と共感を持って僕らは歓迎した。そんな時代から気の遠くなるほど歳月を経て、今やヒーローは僕の中で不在のまま。闘うヒーローやヒロインは今やアニメやゲームの世界の中だけだろう。

美術家の先輩から「ワイダの『灰とダイヤモンド』を見とき」といわれ、しかし今のようにビデオやDVDのない時代のこと。偶然TVでオンエアされて見る事が出来たのが20代だった。正直この映画はわからなかった。いや映画自体のストーリーや内容は明確でわかりやすい。ただポーランドという“正義”の社会主義国家に、なぜこんなテロリストがいるのか、なぜナチスのために共に戦った“正義”の労働党幹部を射殺する理由があるのか、なぜ友邦ソビエト

が敵なのか、それが全く理解できずにいた。

一般にA・ワイダの初期作品「世代」「地下水道」そして本作は、抵抗三部作といわれてきた。ナチス占領下のポーランドで、レジスタンスに目覚め、ソビエトへの希望と共産主義者として成長する青年を描いた「世代」、ワルシャワ蜂起を背景に、ソビエトから援軍のないまま、地下水道を絶望的に敗走するポーランド軍兵士を描く「地下水道」。これらはまさにナチスドイツへの抵抗だが、「灰とダイヤモンド」は少し違った。

ナチスドイツに代わり、“正義”の国ソ連が進駐し、ポーランドを共産国家として変質させていく過程で、青年愛国者がソ連共産党に協力する労働党幹部をテロルする話だ。「希望を持って生きていた時代と違い、その日を生きているだけ」と語るテロリストの言葉は、ドイツがそのままソ連に変わり、自国はついに何も変わらず再びの闇を迎えたことを意味する。

僕が「灰とダイヤモンド」を理解できなかったことはまさにこの部分で、当時ソビエトを正義の国と信じ、希望の国が他者を蹂躪（じゅうりん）するなんて思いもしなかった。射撃手マチェックの怒りとは、その後、再びこの映画を見た僕にやっと理解できた。何のことはない。僕は、幻想としての正義或いは希望の国が、真にあると思いついていた無邪気さで、映画をわからなくしていただけた話だった。

しかし、この映画は正邪二項に陥らず、労働党幹部の人物像の造形や、重圧の中の戦勝記念パーティーでの乱痴気ぶりが皮肉に描かれ、映画史上有名なゴミだめの中で、苦悶とともに殺されていくマチェックの情景が、心を込めて描かれている。

hidarimaki

